帰国報告

～ベルギー王国･ブラッセル日本人学校～

前　ブラッセル日本人学校（H15～18）
現　佐呂間町立浜佐呂間小学校　　宮下　和子

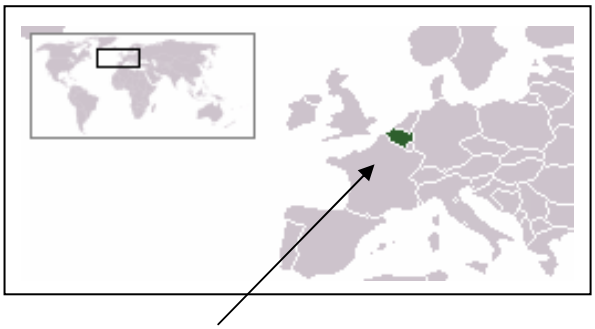
はじめに

平成１５年４月から、平成１８年３月までの４年間、在外教育施設派遣教員としてベルギーのブラッセル日本人学校に勤務した。ベルギーの国では街角を歩くといろいろな人種の人とすれ違う。特にブリュッセル首都地域に住む外国籍の人の割合は約３割という。まさに国際都市である。地理的にヨーロッパの中心に位置し、以前から国際交流に適した場所であったことや、EU 本部〈欧州委員会〉の所在地であることさらに、NATO〈北大西洋条約機構〉の本部がおかれていることが大きな理由である。私はベルギーの地で多く人と出会い、多くの貴重な体験をさせてもらった。

（＊ブラッセル仏語読み　ブリュッセル英語読み）

１．現地の様子

①ベルギーという国について

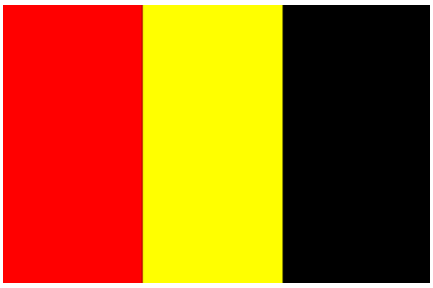


ベルギー王国･ブリュッセル

基礎データ

面積	32.519k ㎡（関東地方くらい）
時差	日本より8 時間遅れ　(4～10 月の夏時間では7 時間)
人口	約1,026 万人（東京都くらい）　日本人は約５千人
民族	フラマン(ｵﾗﾝﾀﾞ語話者)　58%
	ワロン（ﾌﾗﾝｽ語話者）　33%
	その他（ﾄﾞｲﾂ語話者など）　9%
言語	フランス語　フラマン語（オランダ語）　ドイツ語
宗教	カトリック　75%
首都	ブリュッセル（約96 万人）
独立	1830 年 10 月4 日　(臨時政府がｵﾗﾝﾀﾞからの独立を宣言)
	1831 年 7 月21 日　(初代国王の下立憲君主制始まる)
政体	立憲君主制　連邦王国

国旗



ベルギーの中心勢力であったブラバンド公家の紋章に由来するが、現在、黒は「力」、黄は「充実」、赤は「勝利」を表すとされている。

（1）国土、気候

ベルギーの国土は１０の州から成り立っており、総面積は約３万平方ｋｍ、日本(３８万平方ｋｍ)の１２分の１以下です。ちょうど関東地方と同じくらいの広さになる。しかし、一つひとつの州には独自の歴史やその歴史から作られた様々な文化が残っている。

国土が高緯度にありながら、北海を流れるメキシコ湾流の影響を受けて冬でも月平均気温は氷点下にならず寒さはそれほど厳しくない。また、夏は７月の平均気温は１６～１７度で、日本の夏のように３０度を越える日が何日も続くということはない。内陸部を除くと、１年間の気温の変化はそれほど大きくない。また、偏西風の影響で夏冬の降水量には大きな変化がなく、年間降水量は８００～１４００ミリです。小雨まじりの曇天が多い天候が特徴である。

（2）日照時間

国土が高緯度にあることは、日照時間に大きな影響を与え、夏至と冬至では、日の出・日の入りの時間に大きな違いがある。夏至の日の出は午前５時５０分、日の入りは午後１０時１０分で、昼の長さは１６時間になる。逆に冬至では、日の出午前８時４０分、日の入りは午後４時４５分で昼の長さは約８時間となる。夏はいつまでも明るく、冬はすぐ暗くなってしまう。夏もカッと照りつけることがなく、冬は霧が多いこともあって昼の長さの問題とともに、太陽の光にあたれる時間は多くない。

（3）治安

ベルギー王国ブリュッセルは、欧州主要国(都市)の中でも比較的治安のよい国(都市)の一つとされている。しかし、ここ数年各種犯罪及び交通事故などは増加傾向にあり、警察などの治安当局もその対策に苦慮している。特に最近では、高速道路における交通死亡事故の激増に加え、窃盗、強盗、車上狙い、空港、主要駅及び、繁華街におけるスリ、置き引き、ひったくりなどが増加しており、日本人旅行客が被害にあうケースが増えている。

（4）言語

１８３１年の独立以来、北部に多く生活して、主にフラマン語（オランダ語）を話すフラマン人と、南部に多く住み、主にフランス語を話すワロン人が様々な場面で対立してきた。当初は公用語がフランス語のみであったことから、フラマン語（オランダ語）を認めさせる運動が北部で展開する。また、第１次世界大戦時には、司令官はワロン人、戦闘員はフラマン人だったためフランス語の命令が理解できない多くのフラマン人が戦死するという事件が多数報告された。そのため、ついに１９３２年の憲法改正でフランス語とフラマン語(オランダ語)の２言語が公用語と認められた。

二ヶ国語表記の看板
上　仏語　下　蘭語

（5）せまい国土に多様な世界　～政治～

１９９３年、憲法改正によってベルギーには６つの「国」が誕生した。６つの国の連邦国家がベルギー王国である。このうちの３つは同じ言葉（オランダ語、ドイツ語、フランス語）を話す人びとによって作られた「共同体」、他の３つは南北の州を併せた「地域」と呼ばれている。

日本の１２分の１というせまい国土の中で１０の州と３つの共同体、３つの地域がそれぞれ独自の発展をめざし、また、独自の文化を大切にしている。これは、独立以来「言語」（主に何語を話すか）をめぐる対立、「地域」（どこに生活しているか）をめぐる対立が様々な場面で見られたことによる。そ

こでそれぞれに権限を与えることで対立をなくそうというのが連邦化の狙いでこのような複雑な形になっている。

〈３つの共同体、３つの地域〉

３つの共同体	オランダ語共同体 ドイツ語共同体 フランス語共同体	オランダ゛語を主に話す北部の人びと ドイツ語を主に話す東部の国境沿いの人びと フランス語を主に話す南部の人びと
３つの地域	フランデレン地域 ブリュッセル首都地域 ワロン地域	北部地域の５州 ブリュッセル市と１８の周辺自治体 南部地域の５州

（６）現地の日本人

現地滞在している日本人は約５０００人といわれている。日本の企業から派遣された人たち、現地で企業を起こした人たち、芸術家（絵、建築関係）、留学生、日本食レストラン経営、日本食材店経営など比較的多い。永住している方、国際結婚されている方も少なくない。

②ベルギーの教育事情

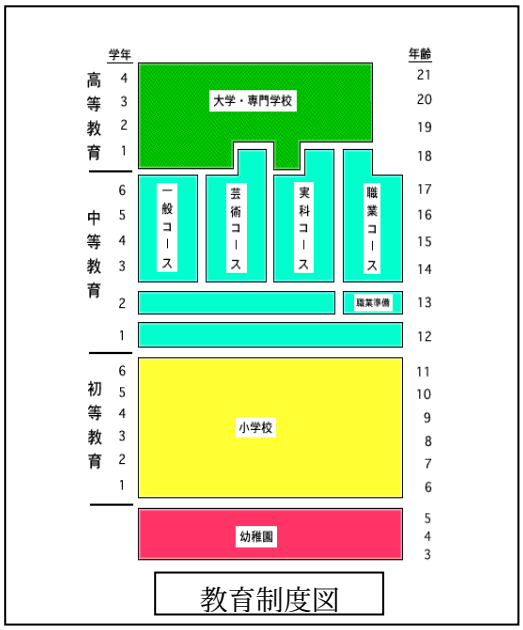
【ベルギーの教育制度】

義務教育以前

ベルギーでは義務教育は 6 歳から 18 歳までであり、子供を幼稚園に入園させるかどうかは全く家庭の自由である。普通、2.5 歳から子供を幼稚園に預けることが可能で、一般に子供を幼稚園に入園させる習慣は広く定着しており、両親の社会階層にかかわりなく、3 歳になる前には子供は幼稚園に入園させられ、小学校への入学準備のような機能を果たしている。

初等教育

法律上、児童は 6 歳になる年度に小学校へ入学し、義務教育が始まる。小学校では全ての児童が同じ科目を学習する。ベルギーでは小学校から「留年制度」が導入されているため、各学年での学習修了要件を満たしていないと判断された児童は留年することになる。



教育制度図

中等教育

生徒は一般に 12 歳になる年度には中等学校へ進学する。しかし、小学校での「留年制度」の結果、留年を経験した生徒は遅れて中等学校へ進学して来ることになる。また、ベルギーでは中等学校第３学年からコース分けが導入される。生徒は第１、第２学年では共通の科目を学習するが、第３学年進学時に「一般コース」「実科コース」「職業コース」「芸術コース」の中から進学するコースを選択することが求められる。「一般コース」は大学等の高等教育機関への進学を目的としたコースで、さらにさまざまな学科に分かれている。第３学年進学時で、一般に全生徒の約半数がこのコースを選択する。「実科コース」は大学・専門学校等への進学、あるいは就職を予定するコースであり、電気・接客業・被服・経理等の学科がある。全生徒の約 1/4 がこのコースを選択する。「職業コース」は終了後に就職することを目的としたコースで、「実科コース」と比べ一般に理論科目よりも訓練科目が多い。ただし、「職業コース」でも、優秀な成績で修了した後さら

に第７学年を修めれば高等教育機関への進学も認められている。「芸術コース」は美術・音楽・ファッションデザイン等を学ぶコースで、進学志望者は0.2%程度と極めて少ない。「一般コース」、「実科コース」および「芸術コース」を修了した生徒は中等教育修了の学歴を取得する。

高等教育

ベルギーでは大学と専門学校が高等教育機関に相当する。高等教育機関への進学に際しては、一般に選抜試験は実施されず、入学には中等教育修了の学歴が要件とされるのみで、進学は全く生徒の自由とされている。

現在ベルギーには８つの主要な総合大学がある。フランデレンにはルーヴァン・カトリック大学（KUL）、ゲント国立大学（RUG）、アントワープ大学（UA）があり、ワロニーにはリエージュ大学（ULG）、モンス大学（UMH）、新ルーヴァン・カトリック大学（UCL）があり、ブリュッセルにはそれぞれ蘭語系（VUB）・仏語系（ULB）のブリュッセル自由大学がある。この他、各地にこれら主要大学と提携関係にあるキャンパスが存在する。これらの大学では普通最初の２年間が教養課程とされており、その後の２年間が専門課程とされている。ただし、医学部は７年、歯学部は６年間の課程となっている。

また、専門学校には３年制と４年制の２種類があり、多種多様の専門学校が全国に存在する。

【ベルギーの学校教育・国際学校】

ベルギーの公立学校の費用はすべて国が補助し、学費は無料（ただし私立学校の場合、有料のところもある）。「言語」のところでも記述したように、大きく３つの公用語があり、小学校３年生ごろからそれを学ぶことが義務付けられている。完全５日制で水曜日は午前中で授業が終了するので、午後は区のクラブ活動（スタージュ）に参加する子供が多い。昼食は学校にもよるがだいたい自由選択で帰宅して食べても弁当でもよい。クラスの人数は３０名前後で、成績等は家庭に対して細かく通知され、学習状況も保護者に知らせ、サインをもらうことが多い。父母会は夜開かれ、両親そろって出席する。保護者は、学校や先生のやるところにはうるさく言わないが、学区制はなく、学校を変わることは自由である。ベルギーでは、通常０歳～１４歳の子どものしつけ及び全行動は保護者の監督・責任下にある。学校の送迎は保護者の責任であり、エレベーターを子どもだけで乗らせないとか、戸外で子どもだけで遊ばせないなど保護者の責任範囲が広く大きくなっている。

ママからの手紙つきお弁当

万年筆を使って書く児童

その他、ブリュッセル市は、EU 本部があり、経済、軍事、その他の面で大変重要な都市であるため、世界中からたくさんの外国人が集まっている。そういった外国人の子供たちのための学校がたくさんある。大きな学校としては、ヨーロピアンスクール、インターナショナルスクール、ブリティッシュスクール、スカンジナビアンスクール、セントジョーンズインターナショナルスクールなど多数ある。

右
スカンジナビアンスクール
左
セントジョーンズスクール

２．ブラッセル日本人学校について

ブラッセル日本人学校　校舎

ブラッセル日本人学校は、１９７３年４月、補習授業校として開校し、１９７９年、全日制がスタート。１９８０年に校舎が完成し、１９９６年には校庭の拡張工事も終え、１周１５０mのトラックと低学年児童用の遊具コーナーを備えた立派な校庭に生まれ替わった。

①　児童生徒について

在籍数　　２００６．５．３０

学年	小１	小２	小３	小４	小５	小６	中１	中２	中３	合計
男子	２３	２７	３２	３５	２３	１７	１３	１３	１１	１９４
女子	２７	２７	２４	２７	１１	２２	１３	７	４	１６２
計	５０	５４	５６	６２	３４	３９	２６	２０	１５	３５６

＊小学部は学年２クラス　中学部は学年１クラスずつ。

〇児童・生徒の出身都道府県

児童数は愛知、神奈川、東京の順で多い。またその他には、日本以外の国から異動した児童もいた。（ドイツ、シンガポール、アメリカなど）

〇児童・生徒のベルギー滞在年数

ベルギー滞在約３～４年後に日本に帰国する児童・生徒が一番多い。滞在年数が増えるにつれ、現地校〈インターナショナルスクール〉に転入していく傾向がある。

〇その他

・登下校は必ず親が同伴。スクールバス通学の児童・生徒も多い。

・児童・生徒の学力は非常に高い。特に語学に関しては小学生６年生で英検３級（中３卒業レベル）、中３で英検２級（高校レベル）を取得する生徒・児童もいた。保護者も教育熱心の方が多く日本帰国後の進路について心配されている方が多かった。

②教職員

日本の文部科学省からの派遣１９名（日本全国からきている）
現地採用の日本人教諭　２名
現地採用の日本人事務職員　４名
現地採用の日本人養護教員　１名
外国語講師　英語４名　仏語　３名
校務員　２名　　計　３５名

職員室一人１台 PC 設置

③年間授業日数・・・２００日（１学期６７日　２学期８４日　３学期４９日）

④日課　・・・登校８：４０　下校１４：３０～１６：３０　（中学部は　１７時までに下校）
（水曜日のみ午前授業のため　１２：４０下校）

⑤外国語授業〈英会話・仏会話〉

ブラッセル日本人学校は週５日制で水曜日のみ午前授業（中学部は火、木曜日７時間授業）である。外国語の授業があり、小学１，２年生はフランス語必修、小学３年生から中学生まではフランス語か英語のどちらか選択して受けることができる。それぞれの授業は能力別クラスで毎日２０分（１～４年）または３０分（５、６年)、中学部は週４回（３０分授業）行われる。また、毎年、英語と仏語、その他のヨーロッパの言語〈昨年はフィンランド語〉でクリスマスキャロルを全校で歌う。

英会話授業(小３)

仏会話授業（小４）

クリスマスキャロル

仏語を取り入れた劇（小１）

⑥現地理解教育

〇社会見学（校外学習含む）

・小学部

１年　しか公園見学　動物農場見学　老人ホーム訪問

２年　りんご農園見学（ジャムつくり)、マルシェ（朝市場）見学

３年　スーパーカルフール見学、チョコレート工場見学
　　じゃがいも農園見学

４年　デルタ消防署見学　ブライユ協会見学、砂糖博物館見学
　　ストレイピチュー運河見学

５年　ホンダベルギー工場見学

６年　ブレーンドンク国立博物館見学　など

ブレーンドンク強制収容所見学

・中学部―ブレーンドンク強制収容所、自然史博物館、イーペル戦争博物館（平和教育）など

〇芸術鑑賞

中学部―モネ劇場見学　常任指揮者大野和士氏による講話

指揮者大野和士さんのお話

イーペル戦争博物館　見学

チョコレート工場　見学

○特別授業〈中学部〉学校に講師を招いて講話

戦争体験―日本の戦争のお話　平井恵美子さん、アウシュビッツ強制収容所体験者のお話 進路学習―ダイヤモンド鑑定士齋藤聖一さん、　レストランイナダ　日本人シェフ　稲田三郎さん 現地理解教育―美術　カロリング体の授業　アンヌマリーさん　　他

⑦現地での交流学習

ブラッセル日本人学校は交流学習を活発に行っており、児童・生徒たちは現地の学校と交流学習を行ったり、現地の行事に参加することによってお互いの文化や習慣などを伝えあい、生徒たちは有意義な時を過ごしている。全体的に児童・生徒たちは交流学習が好きな人が多い。普段は通訳の先生がついて、相手の学校との交渉、連絡調整など行っている。

○現地校との交流学習

・小学部―各学年で年約２回程度交流学習を実施。

・中学部―各学年で年１～２回実施。

中学部の場合、１年生はマゼイク校（文化交流）、２年生はラサンプション校と数学の授業交流、サンジュリアン校と英語の授業交流、３年生ブリティッシュスクール（文化交流）、３学期に全学年合同でセントジョーンズスクールと文化交流を行った。けん玉、書道、折り紙など日本の伝統的な遊びやおもちゃを現地校の生徒に実演して教えたり、いっしょにやったりして交流をした。その他、ヨサコイソーラン節の踊りをいっしょに踊ったり、太鼓をたたいてリズムをとったりとみんなで楽しむことができた。

○地域のイベントに参加

・サンジュリアン祭　・ネールペルト国際音楽祭（２年ごとに開催される合唱祭）

よさこいソーラン節

折り紙

書　道

写真　中３　ブリティッシュスクールとの交流の様子

３．現地での教育実践

○美術授業

ヨーロッパに古くから伝えられる筆記体“カロリング体”を体験する学習。

○英語授業（実践で使える英語力を身につける活動）

・ベルギーのメトロ路線図を使って電車の乗り換えの表現を学習、ロールプレイ。

・サマースクールで交流したドイツ校の生徒に英語のメールを送る学習。（PC を使って）

・ベルギーに滞在しているさまざまな国から来た人に英語でインタビューし、答えてくれた内容を聞き取るという学習。（内容はビデオに録画し、PC を使って英語を聞き取る活動）〈グループ活動〉

・サンジュリアン校との英語授業交流〈中２〉“日本を伝え、ベルギーを知ろう！”〈以下内容掲載〉

中学部2年　St. Julien Parnasse 校との交流

①. 目　的　　・　自主的な交流を通してコミュニケーション能力を高める。
　　・　「違い」を肌で感じることで異文化への理解を深める。
　　・　英会話での交流の難しさ、楽しさを体験して、英会話学習への意欲を高める。

②. 期　日　　平成　１６年　１１月　１８日（火）
　　９：００～　１１：５５

③. 実施者　　宮下和子　・　小野　敏征

④. 相手校：　Institut Saint-Julien　24
　　Av. De L'Eglise　St. Julien 18
　学年：　中学生　１４～１５歳　１９名
　担当：　Ms. Richir 、宮下〈英語教諭〉

⑤. 交通手段　　徒歩（１０分）

⑥. 準備　　よさこいソーラン節のＣＤ、法被
　　日本文化などの紹介（プレゼンテーション）で使う用具、折り鶴、色紙（プレゼント）、

（事前準備で考慮したこと）

サンジュリアン校の英語教員と密に連携を取り、計画をいっしょに練った。サンジュリアン校の生徒も英語を学習してまだ２年目ということでこの交流で生徒たちの英語の学習の意欲づけ、きっかけを更に作ることができるように工夫した。プレゼンテーションの内容についてはお互いの学校の生徒たちが相手の国のどんなことを知りたいか〈例えば食べ物、日本の学校制度など〉事前に生徒たちにアンケートを取り、多いものを５つそれぞれ相手校に伝えた。それを元にプレゼンの内容を考えていった。生徒たちの興味・関心・意欲を大切にした。

⑦. 内容

時間	行動	活動内容
８：５０	出発・徒歩	・朝の会終了後、ホールに集合し出発。
９：００	到着　あいさつ	・St. Julien の代表と担当の先生の出迎え、あいさつ。
９：１０	ダンス （よさこいソーラン節）	・１回目はＪＳＢの生徒だけでソーラン節を踊る。２回目にSt.julien の生徒がＪＳＢの列の間に入り、いっしょに踊る。
９：２０	ゲーム （ジェスチャーゲーム）	・５つのグループに分かれる（班はＪＳＢと St.Juilen の生徒を混ぜて構成。） ・グループごとでお互い英語で自己紹介をする。 ・グループごとに分かれ、縦に列になって並ぶ。 ・Richir 先生から５つのグループにカードが渡される。 例）　someone drawing a picture （絵を描いている人） ・最初の人からカードに書かれている内容をジェスチャーで次の人に教える。 ・最後の人は答えを英語で言う。正解していれば１ポイント。
９：５５	学校案内	・班ごとに分かれて St.Julien の生徒が学校を案内してくれる。
１０：３０	ティータイム	・St.Julien の生徒がベルギーの有名なお菓子やジュースを用意、みんなでおいしく食べる。

時間	行動	活動内容
１０：５５	プレゼンテーション （日本とベルギーの文化交流）	・ St.Julien とＪＳＢの生徒で５つのグループに分かれ、それぞれ１０分ずつお互いの調べてきたこと、用意してきたことを英語で発表する。 ・ その後５分間のＱ＆Ａタイムで分からなかったところやもっと知りたいところを聞きあう。 ・ グループをローテーションし、違うグループ同士で発表しあう。
１１：５５	お礼の言葉	・ＪＳＢの代表（２名）、St.Julien の代表が英語でお礼を言う。 ・ＪＳＢの生徒から手作りの折り鶴を一人ひとりに手渡す。
１２：１５	学校出発	

⑧．生徒たちの感想

・サンジュリアン校との交流が終わり、ため息と共に出た言葉が「伝える事ってムズカシイ。」でした。やっぱり本からじゃ学べばない外国語ならではの特色というものを感じました。

・交流を通して、僕はやはり日本文化と異国文化はだいぶ違うという事を感じた。しかし民族が違ったり、言語が違っても、心は通じ合わせることができることを知った。

・特にプレゼンテーションはとても楽しかったです。サンジュリアン校の生徒達がベルギーの行事、ファッションなどを教えてくれました。僕はとても心に残りました。たぶんサンジュリアン校の人達も僕達のプレゼント（折り鶴など）を見て喜んでくれたと思います。

・私は自分ができる英語を使って、一生懸命日本の行事について説明しました。そして見事本番成功！私が今回の交流で学んだ事は、「いくらきつくても大変でも、一生懸命やれば、相手がだれであろうと、その気持ちはきっと伝わる。」ということです。

⑨．交流を振り返って

ほとんどの生徒は交流授業を過去に行ったことがあったが、自国のことについて改めて考え、調べ、英語で相手に伝えるという取り組みは初めてであった。事前にサンｼﾞｭﾘｱﾝ校の担当の先生とメールでやり取りを行い、お互いの生徒たちが発表する内容を事前に確認しておいた。また、事前に練習していったソーラン節はとても好評だった。プレゼンテーションの準備では、生徒たちはみんな意欲的に取り組み、日本のお弁当の中身や作り方、箸の模擬体験などバラエティに富んだ発表が見られ、現地の生徒も興味深く聞いてくれた。それぞれのグループが工夫を凝らしたプレゼンを当日披露してくれた。最後の感想には「自分の英語が通じたときはとてもうれしかった。」という感想もあった。ＪＳＢの生徒達にとっても有意義で自信につながる取り組みができた。

終わりに

この４年間、大きなけが、病気もなく任務を終えることができたことに感謝している。何がなんだかわからない１年目、やっとやることが見えてきた２年目、責任ある仕事がまかされた３年目、少し余裕を持ちつつも引継ぎ準備で必死だった４年目。今思うと４年間心身ともに本当に鍛えられ、またとても貴重な体験をさせてもらったなと実感している。仕事は本当に多忙の毎日だった。毎日の教材研究、次から次へとやってくる行事の準備、保護者との対応、外国語講師との話し合いなどなどプレシャーも多く、倒れてしまうのではないかと思ったこともあった。そのたびに同僚の先生方が助けてくれたり、励ましてくれたりしたおかげで乗り越えることができた。その先生方からも多くのことを学ばせてもらった。今振り返ってみると、無我夢中にやってきたおかげで、いろいろな意味で自身が鍛えられ、それ以上にすばらしいものをたくさん得られることができたと思う。すべてに感謝している。

ベルギー滞在中は本当に多くの人との出会いがあった。世界各地、日本各地から来たすてきな生徒・児童たちとの出会い、教師として力のあるすばらしい先生方との出会い、現地の学校の元気で明るい生徒・児童たちとの出会い、現地の笑顔の素敵な先生方との出会い、日本人学校だからこそ得られた貴重な体験だ。また、日本人学校の生徒たちと過ごした日々は本当に楽しかった。海外に住む子供たちは将来的にも日本と現地国、いや世界を結ぶ架け橋になる存在である。その教育に少しでも携わることができ、私は本当に幸せである。

最後に、私はベルギーでの異国の地での生活を通し、“ みんなちがってみんないい ” という言葉がとても好きになった。ベルギー人であれ、何人であれ、人間同士のつきあいに肌の色や国籍は関係ない。先入観なく他国の人と語り合い、文化や価値観など新しいことを吸収し、ほかのよさを知ることにより、自分の意識が多様化し、視野が広がる。大切なのは、自分の考えをしっかり持ちながら、相手を積極的に理解しようとする心であると思う。それが国際理解の大切な一歩であると思う。ベルギーに行かなかったらそれを実感しなかっただろう。これらの経験を今後に役にたてていきたいと思う。

最後に派遣に際して、さまざまな形で協力いただいた方たちに深く感謝いたします。

卒業予選会

補足：
H15 年　中学部２年生担任
H16 年　中学部２年生担任
H17 年　中学部３年生担任
H18 年　中学部３年生副担任
担当した教科
英語　美術　家庭科（中学部）
小５家庭科

研究授業

参考文献
・副読本　私たちのベルギー
・障害のある子と暮らすベルギー
芳武敏雄著者